

第8分科会

座間市教育研究所

板橋 育子 与那覇 歌織

高山 明志 佐藤 明日香

発表テーマ

小中連携を見据えた外国語教育の研究

1 研究の目的

小・中学校の外国語教育に関する現状を共有し、小・中学校それぞれでできることを探り、小中連携に生かしていく。

2 小学校教諭へのアンケート調査

令和4年度、市内の小学校教諭201名に外国語教育についてのアンケートを行った。75.1%の教諭が外国語教育に関して困難を感じており、主な困り感は「授業の進め方」、「評価基準の作成」、「ALTとの連携」に集中している。評価に関しては「規準の作成や各領域における評価方法が難しい」という声が多く、自身の英語力に不安を感じる教員も多く見られる。授業の進め方に関しては、ALTとの打ち合わせが困難であることや、自分一人で授業を進めることへの不安が浮き彫りになった。

3 中学生へのアンケート調査

令和5年度、市内の中学生1771名に行った外国語に関するアンケート結果によれば、外国語に対する興味・関心は中学校進学後に変化している。特に、中学校1年生の1学期から2学期にかけて興味・関心が増加する生徒と減少する生徒に大きく分かれる傾向が見られた。興味・関心が増した理由としては「読めるようになった」、「書けるようになった」という達成感が挙げられた。一方で「書く内容の難しさ」や「文法の難しさ」が興味・関心低下の一因となっている。中学校では「書くこと」が求められる頻度が増え、小学校での学習からの移行が中学生にとって課題となっている。

4 日頃培われた素地を生かした授業の展開

学習指導要領によると、中学校では外国語で「書くこと」の内容が「身近で簡単なもの」から「日常的な話題」や「社会的な話題」に関するものになっていき、「正確に」、「まとものある文章」を書くことが求められている。「書くこと」は最も難しい領域であるが、中学校では定期テストや単元テスト、小テストなど「書く」ことが多く、小学校のうちに少しでも「書く」に触れておくことは中学校でも役に立つ。そこで、中学校教諭が一から授業を組み立てるのではなく、日頃の外国語の授業の流れ、つまり「外国語の授業で培われた

素地」を生かしつつ、6年生が「書く」に触れる機会を増やす授業を目指した。

扱う文法事項は過去形である。“have / had”という単語はイメージが持ちづらい側面もある。そこで、授業の始めに毎回行っている“What subject do you have today?”という質問に対して児童が“We have Japanese, math and English.”と応答するやり取りを生かし、「昨日の時間割を英語で書いてみよう」という目標を立てて授業を展開した。

始めのあいさつはいつものように日直の児童が英語で行う。歌とチャンツの後、今日と昨日の時間割を提示し、ワークシートを活用しながら、『いま』と『むかし』の違いを見つけよう」と発問する。違いを見つけた後、ワークシートの「なぞり」エリアを経て、3段の4線上に“We had P.E.”のように昨日の時間割を書いていく。書く際のポイントも確認した。3段の4線上に英文を書いていく作業は児童にとってとても負担が大きいものであることが伺えたが、児童からは「書くことは大変だったけど達成感があった」、「中学校の英語の授業のイメージが湧いた」等の前向きな発言も散見された。

5 小学校でできること

「書くこと」の抵抗感を軽減するために、小学校のうちに「聞く、話す、読む」といった言語活動をできる限り多くし、「書く」につなげることや「書くこと」に楽しく触れていくことが必要である。例えば、「5分間チャレンジ」、「英語しりとり」、「穴埋めゲーム」は、音と文字を結びつけ、書くことにつなげていく活動として有効である。

6 中学校でできること

英作文を書く際「例文からいきなり作文を書く」のではなく「例文、なぞり、作文」の流れにすることで、書くことに苦手意識のある生徒も取り組みやすくなると考えられる。その際、ワークシートもなぞりの有無を自分で選択できるようにすると、個別最適な学びへもつながっていく。

7 研究の成果と課題

成果として、生徒と教員双方へのアンケート調査から、小中連携の視点で「書くこと」についての授業を研究し、児童に達成感を感じさせることができた。これは日頃より小学校の外国語活動で素地を培っているからこそ成しえたことである。

課題として、中学校教諭が「小学校で学んできたことを中学校につなげていく」という意識を持ち、実践していくことが挙げられる。それにより、小学校と中学校とのギャップも減り、英語に対する苦手意識の減少にもつながり、真の小中連携となっていくことが期待される。